法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

沖縄女性と台湾植民地支配

又吉, 盛清 / MATAYOSHI, Morikiyo

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
16
(開始ページ / Start Page)
329
(終了ページ / End Page)
352
(発行年 / Year)
1990-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002786

Hosei University Repository

沖縄女性と台湾植民地支配

又吉盛清

一　はじめに
二　行商婦人と沖縄商店
三　日本人で最初に渡台した沖縄女性
　1　「商売女」（売春婦）の渡台
　2　「琉球女」（売春婦）の渡台

Hosei University Repository

一、はじめに

一八九五年（明治二十八）の台湾領有から、台湾植民地支配の五〇年余を通して、沖縄人の在台者は、どの位いたのだろうか。これは、公的な統計資料がなく、年次的に掌握することは、極めて困難である。ここでは、手元にある断片的な資料の中から、判断してみた。

沖縄人の台湾渡航は、領有直後から早くも始まっていた。新領土、台湾の割譲は、沖縄にとって新しい就職市場が開拓されたことを意味した。多くの教員、土木人夫、官吏、漁民、「琉球女」（売春婦）、行商婦人、女中らが職を求めて渡台した。

明治三十年代の初めには、「台湾熱」と呼ばれる、一種の台湾ブームが起こり、沖縄からの渡台者が増加し、台北を中心に、四、五百名はいたと思われる。一九一一年（明治四十四）には、約千名が定住し、大正期に入ると、五千名に増加した。一九三〇年（昭和五）には、七千四百余名が、確認されている。その後、徐々に増え続け、昭和十年代には、約一万名を突破した。

その後は、さしたる変動もなく推移していくが、一九四四年（昭和十九）の沖縄戦による台湾疎開者が、一万四千名渡台し、更に、日本の敗戦により南方から引き揚げてきた沖縄人が、一時期、台湾に止ったので、これらを合わせて、三万余名になった。

だが、ここでは、疎開者と、南方からの引き揚げ者は、戦時から戦中、敗戦による一時的な増であるので、別枠で考え、台湾植民地支配の五〇余年を通して、台湾に職を持ち、台湾で生れ育ち、そこを終生の地としていた、一万五千名から二万名を、最終的な在台沖縄人として、とらえておきたい。

沖縄から多くの渡台者を出した、台湾領有から、明治三〇年代初期の沖縄の状況は、天然痘が全県下に猛威をふるい、一八九七年（明治三〇）には、三百二十九名の死者を出しながら、なんら有効な対策も打ち出せないままに人々は飢えて死線をさまよい、食糧問題は深刻になっていた。一八九八年（明治三十一）に、離島の渡名喜、島島に飢饉が起こり、また、二、三年来の金融逼迫もあって、手の施しようもなく、放置したままであった。更にその翌年にも、追い打ちをかけるかのように、久米島にも飢饉が起こり、飢えをしのぐために致死量の毒性を持つ蘇鉄の実を溶解させて毒素を抜き取って常用するという、悲惨な状況が続いた。

それでも県には、直面する状況を打開する有効な手だてはなかった。〝脱出志向〟の厭世的な雰囲気が蔓延し、夢と希望を求めて活路を海外に求めるという動きが顕在化した。沖縄最初の第一回のハワイ移民が、当山久三らの勧誘斡旋によって沖縄を後にしたのは、このような状況が続く、一八九九（明治三十二）十二月のことである。台湾への渡航も、また、この窮乏する沖縄の社会、経済的な状況の中で移住、就職、出稼ぎとなって放出されたものであった。

本稿では、これら沖縄人の台湾体験の諸相を、「行商婦人」と「琉球女」を通して明らかにし、台湾植民地支配と沖縄、沖縄人の関わりを問うてみたい。

Hosei University Repository

二、行商婦人と沖縄商店

領有後の台湾は、沖縄商品の有力な移出市場となる。早くも領有の翌年には、台湾への沖縄漆器の移出額は、三千八百円になり、これは、他府県を含めた漆器の移出総額、一万四千四百五十七円の二十六％に当たる額になった。この額は、更に伸びて、一八九七年（明治三〇）には、六千六百円に倍増した。

一方、反布の移出も、一八九六年（明治二十九年）の一万四千六百円から、その翌年には、二万三百円になり、これも増加の一途を辿った。しかし、漆器の台湾移出は、一九二六年（昭和一）に一万一千八百円、二七年（昭和二）一万二千二百、二八年（昭和三）、九千七百円と、昭和に入ると下降を辿り停滞したが、それでも台湾は、沖縄にとって重要な漆器市場であることに変わりはなかった。

沖縄商品の移出市場としての台湾は、他に砂糖、鰹節、石炭、松材、豚などがあり、一九二六年（昭和一）から、二八年（昭和三）までの三ケ年平均で、四〇万二千三百円の価格になった。移入品については、粳糯米、包種米、麻織物、竹材、大豆などが目立ち、移出品と同じ年の三ケ年の平均が、九四万九千円になりその差額は、約五四万三千七百円の沖縄側の入超になったが、漆器と反物については、沖縄からの一方的な超過となっていた（『台湾時報』青木繁「沖縄の森林と台湾」昭和六）。

台湾には沖縄商店と呼ばれる、これらの商品を取り扱う小売店がありその数は、一九〇〇年（明治三十三）頃には、台北に六軒、基隆に七軒、台南に四、五軒あった。そして、台北だけでも、常時、三〇名を下らない、沖縄の行商婦人が市街を往来して、沖縄商品を売りさばいていた。

漆器と反布は、沖縄唯一の特産物として、他府県のものより、需要が多い割には、販路が確立してなく、台湾だけでなく、長崎、博多、門司、下関、神戸、大阪などでも、行商婦人の手によって販売されていた。

台北の、沖縄商店は、城内の「北門街」と、「府直街」にあった。現在の博愛路と延平南路に当たる一角である。その場所は、台北停車場（現台北駅）から北門を通り抜けると、そこに台北電信郵便局（現台北電信局・郵便局）が見える。その近辺に沖縄商店と、沖縄婦人が商品の取引きをしていた露天市場もあった。

沖縄商店と市場には、いつも「漆器類大安売り」の、大きな看板が掲げられて、主に城内に住む「内地人」を顧客にしていた。また、ここを根じろに沖縄婦人が、漆器や反布を頭上で運搬して台北から、遠くは、中南部の新竹、苗栗まで出かけて行き沖縄商店に商品を販売したり、行商に出たりした。（『琉球新報』明治三十三年五月二十三日）

当時の台湾は、占領から四、五年目のことで「土匪[1]」や、「生蕃[2]」の武装蜂起、襲撃が相ついでいた。一八九八年（明治三十一）十一月、中部の嘉義の蜂起では、巡査、憲兵隊員らが死傷するなど、危険な状況が続いた。また日本人の酌婦が、鳳山に行く途中で、「土匪」に捕われて行方不明になる

Hosei University Repository

事件が起こった。女、子供といえども襲撃の的にされ、日本人が各地を通行するのは、危険な状況であった。南部の恒春では、三人の沖縄人漁夫が、「土匪」の襲撃にあって、死去する事件もこの時に発生した。

衛生状態も最悪で、マラリア、ペスト、コレラなどが流行した。このような状況を恐れた多くの人々が「台湾迷惑何々、ペスト、コレラに腸チブス、そしてマラリヤ未だ止ぬ、山にや生蕃首を取る」と、いい合った。

このような中を、いのち知らずの沖縄婦人が、行商をして品物を売り歩き首をはねられたのが何人もいた。これらの行商婦人の多くは、那覇の若狭町や久米町の士族出の女性であった。沖縄の商取引きは、女性の手になるものが多く、領台後の台湾に大挙してこれらの女性が乗り込んでいったのである。行商婦人の装いは、琉装に結髪、ハジチ（入墨）をした手を出して、裸足で行商して回った。ハジチは、沖縄女性の風習の一つであったが、行商婦人が町を歩くと、町中がその体裁の異様さに驚き、これらの行商婦人を見物しようと黒山の人だかりになった。

台湾人の中には、行商婦人の手の甲のハジチを見て、「日本の生蕃」（蕃族）が出て来た、といって嘲けたりする者がいた。また「内地人」からは困惑され、劣等視、つまはじきにされる原因になった。また、在台沖縄人の有識者からは、絶えず批判の的にされて、早急に法律を制定してハジチをした婦人の渡台を禁止すべきだという、強行意見が出るなど、風当たりが強かった。

しかし、行商婦人は、それを意にかいする様子もなく平気であったといわれる。というのは、当時の沖縄では、琉装、ハジチは一般的な風習でごく当り前のことであった。自分の姿が、奇異奇観、特殊なものとは誰も、思わなかったのである。

沖縄には、近代まで女性が、成人儀礼の一つとして、入墨を施すハジチの風習があった。針を束ねた墨を、手の指、背、手甲、茎状突起の部分に突き入れて、模様を決めたが、沖縄本島と宮古、八重山諸島の形状には、地域差があった。

中でも宮古の入墨には×印が多く使われており、これは、台湾の南部地方に分布する山地族のルカイ・ピュマの女性とよく似て文様であった。そのために、台湾人は、ハジチをした行商婦人を見て、「日本の生蕃」と呼んだのである。

ハジチは、一八九九年（明治三十二）、日清戦争後の風俗改良のかけ声の中で、禁止令が出されたが、ハジチへの執着は根強く、昭和初年に至るまで続けられた。ハジチをした行商婦人を奇異異観なものとして、これを軽蔑し差別するのは、沖縄の独自の歴史や文化に対する理解と認識が十分ではなく、問題は、差別、排除する側にあったが、現実には、これら行商婦人の活躍が、台湾植民地における、決定的ともいえる最初の沖縄人観を流布することになり、その後の台湾植民地を生きる沖縄人に対する、差別と偏見を増幅させることになった。

ある在台沖縄人教員は、ハジチをした老母の手に年中、白い手袋をかけさせたし、また、「内地人」

Hosei University Repository

の経営する事業の求人募集に「・・・求む、但し琉球人と本島人（台湾人）は除く」という、広告や張り紙が出たりした。単に沖縄人であるというだけで、一方的に排除され、就職、就学の機会を奪われた事例はいくつもあった。一九〇〇年（明治三十三）、台北病院に就職を志願した仲吉医師は、「琉球人は採用しない方針」だということで不合格になった。またある教員志願の沖縄人もその方針の下に門前払いになったのがいた。

台湾における下層労働者への差別と偏見は、最も深刻であった。漁民、土木人夫、雑役婦や台湾名物といわれた女中（戸内使用人）など、沖縄人在台者の多くは、これらの人々で占められていた。沖縄人は、在台日本人社会の底辺に位置づけられて、大きな困難に出会ったのである。

行商婦人の行商には、もう一つ、大きな問題があった。それは、扱う商品に粗悪品が多く、わずか一円八〇銭の商品を、七、八円まで掛け値をして、暴利をむさぼる者がいて、信用をなくしていることであった。これは、沖縄人の信用を目前の小利に汲々として全面的になくすものだと、頭痛の種になったが、一向に改善されることなく、逆に、品物を買わない顧客がいると、「クニヒヤーヒンスー大和人」（この野郎、貧之人の日本人）などと、方言を使って悪口をたたいたりした。

一八九九年（明治三十二）六月二十九日の『琉球新報』は、新竹の上原オミトが経営する沖縄商店の営業を、「新竹通信」で、取り上げているが、「上原は、一八九七年（明治三〇）から特産物の、反布、漆器、泡盛などを扱ってきたが、粗悪品が多く、その上、代価をごまかしたので、沖縄商店は、

信用できないということになっており、そのため、店頭では、品物が売れなくなり、主の上原が、台中などに出かけて行商をしていることが多くなった。信用のある営業をしていれば、買手の「内地人」もいたので、危険をおかしてまで行商することもない」、というものであった。

一九〇九年（明治四十二）、沖縄教育会は、機関誌の『琉球教育』で、この問題を取り上げ、これらの行商婦人の行状を次のようにルポして、その改善を要請している。

「反布類ですが斯う云うと御気の毒ですが沖縄婦人等が持って歩くのは信用出来ませんねー何故かと云えば他府県産の安い絣を買って包紙を取換えて琉球の絣で御座ると云うて高く売付けるのですからもう一つは馬鹿に掛値ということです僅か二三円の品物を買うにしても掛値というものですから二三時間もかかる事があるのですあれでは商売の出来る筈がないですよだから土人迄（チャンコロ）が相手にしないと云うのですよ殊に言語や風俗までが変っているので土人の或者などは日本生蕃と云って居るそうですよ」。

また、その行商の仕方も問題になった。行商婦人は、主に台湾総督府の官庁や官舎、会社の事務所などを回って行商をしたが、どこにでも遠慮会釈もないままに、上り込んで嫌がられた。その様子は、ちょうど「五月蠅」のようだったと、ある沖縄人は眉をしかめて評している。

こうして、ますます行商婦人の信用が失墜していくと、とうとう「内地人」の営業する商店などでは、これらの行商婦人との取引きを停止したり、琉球の商品は仕入れないという申し合わせをする店

Hosei University Repository

舗も出て来た。(『琉球新報』明治三十二年十一月)

このような行商婦人の評判は、沖縄にも伝えられたので、県では、「県下産業界の改良発達にも由々しき問題だと指摘し、これを対岸の火事として黙過することなく、善後策を講ずるべきである」という声も出たが、具体的な措置は取られないままであった。

沖縄の反布と漆器は、特産物ということもあって需要者は多かったが、売上げは毎年、減少していた。このため「行商問題」の解決は、緊急な課題になっていた。しかし具体的な改善策はなく、問題を長びかせていた。反布には、正式な沖縄織物組合の検査を受けてないのが多く、漆器も、若狭町や久茂地辺りの職人が、糊口稼ぎで製作した粗悪品でこれらの商品の生産者の多くは、小売りの小資本であり、零細の店舗で占められていて抜本的な解決にはならなかった。

沖縄の行商婦人が扱った商品は、総じてこのような状況下で生産されたものであった。信用をなくしたのは、必ずしも行商婦人の行商上の不得手や作法上の問題だけではなかったのである。

三、日本人で最初に渡台した沖縄女性

1 「商売女」(売春婦)の渡台

領有初期の台湾は、まだ戦時下のような状況にあって、兵士は、何時、襲撃されるかも知れないという恐怖に怯えて、やけくそになり、酒と女に身を粉わし刹那的になっていた。他の軍属、人夫も、

また同様であった。官吏も同じようなもので、新植民地の「支配者」として、権勢を振りかざしてはいたが、夜毎に夜の町を徘徊、高吟し女に明け暮れていた。このような当時の様子を「(台)湾的現象」だと、揶揄したある識者は、『台湾協会報』(明治三十五年、五〇号)に「青楼紅酒泉肉堵を以て唯一の快楽とし、紳士も官吏も商人も労働者も均しく之れに酔飽せる新領土的、野戦的」と、その状況を報告している。

一方、台湾総督府は、この現象を兵士の「管理上」、必要なものとして容認し放置したので、「台湾に行けば寝ていても、金が儲かる」という、噂が立ったので、その「類(たぐい)」の女性が動きはじめ、「元(もと)手はいらない、三味線一挺を資本」に、というわけで全国から、台湾に集まってきた。

政府は、台湾の植民地支配に当たっては、日清戦争で清国から奪い取った賠償金を、殆ど無制限に、軍事費の名目で支出し、また、その他にも、各種の民政費という名目の軍事費が支出されたので、その賑わいは、大変なものがあった。そこへ利にさとい御用商人らが、大挙して乗り込み総督府の役人、軍人らを競って、もてなしたので花柳界は夜毎、「紅裙紫紗」の修羅場になった。特に、土木請負業者の接待のよさは利権と結びついて我が世の春を謳歌していた。

当時、台湾の日本人芸者の「玉代」が一時間、三円といわれていた。これは東京の新橋芸者が、二時間一円二十銭だったのに比べると、植民地台湾での、遊び放題が解ろうというものである。この頃日雇労働者が、食うや食わずで汗水流して働いて、一日当たりの賃金が二十六銭(明治二十九年)か

Hosei University Repository

ら三十七銭（明治三十二年）の頃で、白米の十キログラム当たりの小売価格が、東京で一円十二銭（明治三十年）であった。

台湾植民地に集まってきた女性は、一九〇三年（明治三十六）の時点でどの位いたのでろうか。娼妓、三百九十一名、酌婦、三十七名、仲居三十二名、芸妓、百三十二名で合計、五百九十二名である。それぞれの呼び方は、いくつかに分かれているが、いずれも男を相手に「商売」に従事する女性であった。そしてこの他に、人数的に押えられない闇の私娼が、この数倍はいたものと思われる。

この「商売女」の増加ぶりは驚くばかりである。一八九六年（明治二十九）八月の「新規則」によって、認可を受けた芸妓と娼妓は、全部で百余名であったので、五、六年の間に五倍に伸びたことになる。日本軍が、正式に軍隊の中に「慰安婦」を持つようになったのは、戦時体制下に入った一九三一年（昭和六）のことである。しかし、領有直後に台湾に入った「商売女」は、実質的に、軍の「慰安婦」としての役割を果たしたもので軍隊と不離一体になって、生命も保障できない戦時下の台湾にやってきた。

これらの「商売女」は、台湾総督府の公許を得て、一定の場所で、監視と取締りを受けることになっており、月一回の検毒制度によって病気の有無の検査も実施された。そのため公娼の場合は、社会的な存在が容認されて、一種「職業化」されていたので、その所在、人数は容易に把握できた。

しかし私娼は、なんらの許可も受けずに、密行的に、売春を行なっており、散在的、移動的であり、カフェー、ダンスホール、待合いなどの芸妓、ダンサー、女給、タイピスト、事務員、酌婦、宿屋の女中な

どにも、交っており混在としていたので、数の上では、公娼よりも、はるかに多いと思われたが、掌握することは困難であり、取締りも容易ではなかった。

総督府の記録によれば、最初に台湾にやってきた芸妓は、一八九六年（明治二十九年）のことで、台北西門街の料理屋、養気楼の小花という女性ということになっている。（台湾経世新報社編『台湾大年表』昭和七年）時は、占領下の軍政が撤廃された後のことであり、それ以前に「琉球女」（後述）が、台北に入っていることが『台北市史』（巻十、台北市文献委員会、一九六二年）に記録されているので、小花は、台湾総督府が、正式に認可した、第一号の芸妓ということであって「商売女」の第一号ではなかった。

「琉球女」のように、正式な認可を受けない、モグリの闇の女が、軍政下の台湾に多数見られた。軍政下では、建前として、民間人の台湾渡航は許されてはなかったが、清国や第三国を経由する日本人女性については、その取締りをなくしたので、香港などから、多くの女性が入ってきた。これらの女性の多くは、日本人の住む、城内に入り、昼間から嬌声をあげて、男の袖を引いたというから、公けに黙認されていたのである。

やがて軍政が撤廃されて、五月に内台航路が就行するようになり、これらの女性が、以前にも増して、われ先にと、台湾に押しかけてくると、城内にいる日本人の接客だけでは「商売」にならず、続々と台湾人のいる万華へと伸びていった。万華には、領有以前から、台湾人の遊廓街があって、地元の遊里になっていた。そこに、日本女性も城内を抜け出して進出したので、その競走が、また一層の賑わいとなって万

Hosei University Repository

華を繁盛させた。

このように台湾に「商売女」が増加してくると、軍隊の中に、性病患者が蔓延しはじめるようになった。兵士の「志気」との関係もあって、性病対策が真剣に検討されるようになった。性病患者については、日本人の「商売女」との接触だけではなく、台湾人女性からの感染もあった。日本が領有した台湾最大の都市、台北は、すでに汚染された「性病天国」となっていたが、衛生施設は、皆無の状態で患者はほとんど野放しのままであった。

台湾接収で台北に入った日本衛生隊の実地調査によれば、「家屋の周囲または庭内には、不潔な汚水が流出し、または各処に溜留したる沼があり、あるいは、人民は犬豚と雑居し、あるいは往々共同便所の設備はあれど、いたるところに、糞便を排散し、ひとり市中に日本人の鑿井（劉銘伝時代）にかかわるという噴水には、鉄管をもって飲用水を供するも、その桶器は極めて不潔で、かれらの脳髄と視力とには、不潔の認識なきがごとし、売春婦は各処に陰顕し、悪性の梅毒に感染し、すでに第一期に及び、骨まで侵されおるものが市中に甚だ多く・・・」と、書き残している。（井出季和太『南進台湾攷』昭和十八年）

このような状態の中で総督府は、台北の衛生問題の早期解決を計るために、イギリス人のバルトンを迎えると共に、一八九六年（明治二十九）七月、公娼に始めて許可を与えて、管理体制を整備する措置を取った。こうして、九月までに当局が掌握した、「内地人」の経営する貸座敷は、三十二軒、料理屋が二十八軒、芸妓五十五名、娼妓四十八名、台湾人の料理屋は十軒、芸妓二名であった。

しかし、ここに挙げられた以上に、日本人女性の売春婦は、もっと多くいたのではないかと思われる。総督府は一八九六年（明治二十九）六月に戸籍整理と人口調査を実施しているが、台北の万華、大稲埕、城内の三地区を合わせた人口は、四万六千七百十名で、一番多いのが台湾人集落地の大稲埕で二万三千百八十四名であった。次いで万華が一万九千七百十一名。三番目が、日本人の多く住む、城内の三千八百十五名となっている。

その内、城内の男女の比較は、男二千二百七十七名に対して、女五百二人となっていた。その他に女性は万華に四百四十九名、大稲埕は、七十六名になっている。この段階で、日本人女性は、台北だけで一千

日本領有初期（一八九六年＝明治二十九年）台北市人口分布概況

人口別	本省人			日本人			総計		
地区＼人口数	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計
城内	九二七	三〇七	一、〇三六	二、二七七	五〇二	二、七七九	三、〇〇六	八〇九	三、八一五
艋舺	一〇、八四〇	七、九〇五	一八、七四五	五一七	四四九	九六六	一一、三五七	八、三五七	一九、七一四
大稲埕	一二、三七六	一〇、二九七	二三、六七三	四三五	七六	五一一	一二、八一一	一〇、三七三	二三、一八四
合計	二三、九四五	一八、五〇九	四二、四五四	三、二三九	一、〇二七	四、二五六	二七、一七四	一九、五三六	四六、七一〇

（艋舺は、城内、大稲埕と合わせて台北三街と称したが、日本統治時代になって万華に改名された）。

Hosei University Repository

二十七名いたことになる。（台北市文献委員会『台北市志』巻三　一九七八年）

これらの日本人女性は売春となんらかの関わりがあったものと思われる。特に、城内と万華に住む日本人女性は、殆んどその「類」を見て間違いないだろう。いずれにしてもこの時期に、千人余も日本人女性がいたというのはいかに売春が盛んであったかが分かるというものである。そして、これらの多くの女性は、「内地」でなんらかの問題を起こして、そこにいられなくなって、逃げてきた者が多く「純潔無垢」な女性は少なくその評判は、かんばしくなかった。台北では、「日本婦人」にして「淫売せざるものなし」といわれ、「台湾の地に道義も糞もなくなっている」と、識者らが嘆いた記録が残っているのは、このことをよく物語っている。

2　「琉球女」（売春婦）の渡台

台北市文献委員会が発行した、『台北市志』（十巻、一九六二年）は、日本人の女性では、「琉球女」が、最初の渡台者であったと、次のように紹介している。

日女初来台

「日據初期、軍政之下、不許日女來臺、間有偸渡者、亦被遣回。

民前十六年（日明治二十九年）三月、軍政雖已撤消、尚不許其正式來臺、間有琉球女四五名、擬由基隆登陸而未能獲准、後取途淡水始潛入臺北、此卽日女來臺北之始也。因其服裝與省人異、長

帶束腰、拖草履、一時驚爲奇觀

民政以後、始許日女渡航。最初有日女兩名來臺北之撫臺街、爲日人飯館「常盤」之女傭。後亦一日婦來臺尋夫、嘗住於占、而臺北之日人及軍人軍屬、都思一親芳澤爲快、使該「常盤」飯館車馬盈門、三日女周旋其間、而其一日之所得意達七百多圓。當時日弊五圓可維持一人一月之生活、其收入之豐、可想像而知矣。」

訳文「日本占領の初期、軍政が撤廃されても、女性の正式な来台は認められなかった。ところが、その間に琉球女が四、五名、基隆より上陸しようとしたが、これは拒否された。その後、女性たちは、淡水にまわり、台北に潜入した。これが、日本人女性のはじめての台北入りとなった。初めて見る琉球女の服装は、台湾人と異なり、長帯束腰（琉装）に、草履ばきであったので、この奇観にみんな驚いた。

そして、民政になって、はじめて正式な女の渡航が許されて、二名の日本人女性が来台し、料理屋「常盤」の女中（売春婦）になり、台北在住の日本人及び軍人、軍属を相手に商売をし、一日の収入が七百円にもなった。これは一ケ月、五円もあれば生活が出来た当時のことであるのでいかに繁盛していたかが分るというものである。」

この時、台北に入った「琉球女」が、何者であったのか、それを証明する資料は、今のところ何もないが、台湾の領有後、沖縄からも多くの売春婦が、渡台したことを思うと、この日本人女性で、最

Hosei University Repository

初の渡台者になった「琉球女」もその「類」の女ではなかったのかと思われる。恐らくは、軍政下の台湾に「一獲千金」を夢見て、男の懐をあてにしてやってきたものであろう。

多くの沖縄女性が、「商売女」として、渡台したことは、よく知られていることであり、台湾植民地支配五〇年間を通じ、台湾各地に沖縄人女性の売春婦が見られた。特に、台湾の振興が、沖縄を上まわるようになると、「玉代」の高い出稼ぎのよい台湾へ、逃亡する娼妓も出てきた。このような女性の動きは、領有直後から見られたが特に大正末期から昭和の初めにかけて、那覇の遊廓に不況の嵐が吹きはじめると、ますます顕著になってきた。

戦前、辻、仲島、渡地と、一大遊廓地帯を抱えていた沖縄は、一名、「男性天国」といわれた。一八九六年（明治二十九）の調査によれば、貸座敷五百八十九軒、娼妓が一千二百九十四名いた。これらの娼妓の「玉代」は、十銭から二〇銭であった。しかも、沖縄の遊廓は、伝統的なしきたりによって、その遊び方は、時間単位ではなく、宿泊制になっていた。

その宿泊の「玉代」が沖縄で一円になるのは、明治三〇年代のことである。台湾では、台北の遊廓が、領有直後から、二時間で二円になっていた。その情報はすぐに沖縄にも伝えられ、「台湾は稼げる」というので、沖縄や長崎など全国の遊廓から、女性が台湾に集まってきた。

那覇の遊廓では、廃業や転業をした楼主や行き場のなくなった娼妓が、台湾や長崎の遊廓に出かけていった。屋号、後道「小湾」の玉寄カメも、その一人であった。彼女は、渡台する前に、台湾に出

かけ、市場調査を行い、有望だと見込みをつけると、金策を急いで、基隆に「沖縄尾類屋」を開業している。

基隆は、台湾の沖縄人集落の中ではもっとも、沖縄人が多く、社寮島（現和平島）には、沖縄人の経営する料亭が、四、五軒あって、二十五名の沖縄人女性が、春をひさいでいた。その、女性たちの出身地は、沖縄の宮古島が多かった。沖縄の先島諸島は窮乏な上、台湾と隣接しているということもあって、これらの女性の大量の供給地になっていたのである。

大正末期に、台北に「琉球式楼」という遊廓を建設する計画が持ち上がったことがある。これは、「琉球女」を目当てにしたものであり、いかに沖縄女性が多かったかが分かる。後に、この建設計画は、沖縄人の体面と、将来の発展に悪影響を及ぼすものであるとして台湾沖縄県人会が反対をして中止された。（『沖縄及沖縄人』昭和二年一月号）

また、台湾南部の地、台南では、一九〇〇年（明治三十三）、「琉球女」を置いた、琉球楼と呼ばれる、料亭もすでに現われていた。琉球楼は、台南の貸座敷営業の指定地域になっていた、南勢街と下南河街にあって、そこには、十二、三名の「琉球女」が囲われていた。那覇の辻遊廓あたりから流れてきた沖縄人楼主が始めたものと思われる。（『琉球新報』明治三十三年六月　日）

台湾植民地ではこのように、多くの沖縄女性が、貸座敷や料亭、遊廓に囲われ、なぐさみものにされていた。沖縄女性も、また、台湾植民地支配の先兵として、「肉体市場」をもって、植民地支配を

Hosei University Repository

支える道具にされていたのである。

琉球楼のあった台南の遊廓は、植民地統治下で、大きな賑わいを見せた遊里であったが、今日でも、そこは、台北の万華と同じように、台湾人の遊里地帯になっており、夜ともなれば、男たちが、群ってくる。ここで使用されている家屋は、日本統治時代からのもので、十二、三軒が、原形のままに残っていた。

建物の外面は、長い年月の中で、いくらか修築を加えた跡があるが、内部は、殆ど手を加えることなく、そのままになっていた。玄関から入ると、セメントを敷きつめた広場があって、そこに、若い女性の源氏名を書いた顔写真が掲げられていた。この玄関の左横に六畳間位のもう一つ部屋があって表通りから、部屋の中が覗けるようになっていた。そこに数人の女性が壁を背にしてすわっているのが見えた。外から男たちが、この部屋を覗き込んで、気に入った女性を、品定めして、奥の部屋に連れ込む仕組みになっているのである。

奥の部屋に行くのには長い廊下があって、両側に二畳間から三畳間位の部屋がいくつも続いている。この部屋は、かつて苦界に身を沈まされた娼妓らが、毎日のように、寝起きをしたり、また昼夜を分たぬ男の相手をし、あたら生命を削った場所でもある。

この十二、三軒のうちの一つが、琉球楼と呼ばれた遊廓であることは、間違いないのだが、それを確認する資料を持ち合わせていないのは残念である。

しかし、今、日本統治時代から残る、古い遊廓跡の廊下に並ぶ部屋を眺めているとこの部屋のいくつかに、「琉球女」が居たのではないか。たとえ、どのような理由があったにせよ、この苦界で身を沈め、春をひさいだ「琉球女」の悲しみの傷あとが、壁や柱にも、しみついているのではないかと思うと、胸がしめつけられるのである。

この想いは、また、台湾最大の遊里地帯であった、万華の遊廓跡でも感じ入ったものである。「琉球女」は、数の上では、台南よりこの万華の方がはるかに多かった。そして、最初の日本人女性として台北入りした「琉球女」がいたのも、この万華であったと思われる。

万華に身を沈めた、沖縄人女性の多くは、一生涯、ここから抜け出すことなく、梅毒に侵されて死んでいった者が多かった。その「琉球女」がいた万華の遊廓跡も残っている。赤いレンガとセメントの壁が異様に黒光りするその建物は、幾多の年月の中で、女性の血と悲しみを吸い取った、怪物のように見える時がある。そして今も、この建物には、年端もいかない、山地族（「生蕃」）の少女が、街路にたむろする男を呼び止めて、部屋に引っぱり込んでいる。

万華の地は、台北では最初に、泉州人によって、淡水河の流域に開かれた地である。ここは、早くから淡水河を要路とする対岸との交易によって栄えていた。道光年間（一八二一年～五〇）に妓楼、娼寮、酒家が開業し、一大遊廓地帯になった。日本の台湾領有後も、遊廓はそのまま存続させ、日本人女性もここに入ったのでその後、遊廓街としての繁栄に拍車がかかり、日本統治時代その地位は、

Hosei University Repository

不動なものとなった。

この賑わいに合わせて、日本料理店が軒並みに開店し、呉服屋、小間物屋などがそれに続いて営業を始めるようになった。この万華で日本人が最初に開業したのは、朝日楼であった。ここには、香港を経由して、長崎出身の女性が多くやってきたので、朝から男がつめかけたという。

日本統治時代、日本人が経営する遊廓は、まず城内から起こり、その後、台湾人街の古い遊廓地帯であった万華へ伸びると、間もなく、大稲埕へと移っていったのである。

大稲埕の、六館仔街（現南京西路）の、日本人の遊廓は、明治三〇年頃から開業を始めた。ここも万華と同じように、現在でも、遊廓跡の建物は残っており、万華や台南よりも、原形に近いものがある。そして、そこも他の遊廓跡と同じように、今も、台湾人の売春街になり、夜ともなるとこれらの遊廓跡の建物は、紅色や黄色のネオンに彩られて、一見してそれらしき女性が、四、五名、鉄柵に囲まれた、部屋の中で、客待ち顔にすわっている姿を見ることができる。

一九四〇年（昭和十五）の調査によれば、この大稲埕には、娼家が二十五軒あって、娼妓が二百二〇名いたことが分かる。その中の四十二名は朝鮮の女性であった。娼家には、新玉楼、朝鮮楼、一冨士楼、三鷹楼、新鮮楼、松花楼、新朝鮮楼、半島楼、柳楼などがあった。（台北市文献委員会『台北市史』巻十）

この娼家の名前からも察することができるように、朝鮮楼、新鮮楼、新朝鮮楼、半島楼などは、朝

鮮の女性がいた遊廓であった。台湾植民地における朝鮮人連行の実態は、まだ明らかにされてはいないが、ここに、台湾で身売りされた朝鮮人の女性がいたことが分る。今後、これらの朝鮮人女性の実態は、きちんと調査され、もう一つの植民地問題として、日本人の責任において正確に解明される必要がある。

ここで、あと一つ問題にされなければならないのは、今日でも台湾人の売春街になり、女性が身を売っている地域は、かつて日本人によって、遊廓街として補強、開拓されたものを、戦後の台湾も引き継いだところが多いということである。これは、日本人が、植民地台湾の中に残してきた、マイナスの遺産ともいうべきものであり、自省されなければならないものであろう。

戦後の日本人の中にある台湾イメージは極めて貧困なものであり、旅行業者が流布してきた「男性天国」という、マイナスイメージが先行してきたが、ひるがえって考えてみるとそのマイナスイメージの大半の責任は、日本統治時代の遺産から発生したものであり、日本人が負うべきものなのである。心したいものである。

〔注〕

(1) 「土匪」と「生蕃」

「土匪」とは、抗日武装をした台湾人のことで台湾総督府は、意識的にこの呼称を多用して蜂起の正当性を隠蔽した。

「生蕃」は、今日、山地人、山朋、高山族と呼ばれる人々で、日本統治時代は、「生蕃」、「蕃人」、「高砂

Hosei University Repository

族」と呼称されて差別と蔑視の中にあった。本稿では、その問題点も浮きぼりにしたいと思い当時の呼称で表記した。